

令和7年度第2回埼玉県孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム運営協議会

1 日 時：令和8年3月26日（木）15：00～17：00

2 開催方法：オンライン

3 出席者：

(1) 出席会員 19名

中島修会長、東宏行会員、小池要子会員、高橋多佳子会員、村田恵子会員、青砥祥子会員、岩上洋一会員、坂本純子会員、春野すみれ会員、土屋麻由美会員、唐澤恵子会員、藤代愛会員、鈴木学会員、谷口周子会員、熊井英朗会員、金澤典子会員、上田優会員、福島朋和会員、小林和政会員

(2) 欠席会員 1名

遠藤まめた会員

4 議事（概要）：

<事務局>

議題1について資料説明

<中島会長>

ありがとうございました。昨年度から引き続きのものや新しいものなどいろいろな取組を、しっかり進められたんじゃないかと思います。いかがでしょうか。皆さんからご意見やご質問などありましたら、まず、東先生から、つながるSAITAMA大賞について一言いただいてもよろしいでしょうか。

<東会員>

私は審査委員長をさせていただいたのですが、たくさんの団体が候補になっていて、どれも本当に甲乙つけがなかったです。全体的には一つの地域に密着した活動が、しき-ずは特にそうでしたが、多かったと思います。また、こども食堂のように全域を見ているようなところも優秀賞の中に入って、リマインドは医療関係や福祉関係の専門職との連携をとっていて、三つの賞が簡単に言うとバランスよく選考できたと思います。

各審査員が採点したので、どこが選ばれるか最終的にはわからなかったのですが、蓋を開けてみると、とてもバランスがいい形で評価できたと思いました。どの団体も本当に特徴があってよかったです。

<中島会長>

ありがとうございました。昨年度も素敵な団体でしたけれども、今年もまた素敵な団体が選ばれたと個人的に思っておりました。

他に、どなたからでも結構ですけれどもいかがでしょうか。新座子育てネットワークの坂本さん、お願いします。

< 坂本会員 >

ありがとうございます。プラットフォームのメンバー増加に伴い、関心が着実に広がっていることを実感しております。また、ショート動画の活用についても、コンパクトで気軽に視聴できる点が功を奏し、再生数が10万回増加するという大きな成果に繋がりました。

次に「つながる SAITAMA 大賞」の受賞団体として、当団体へ動画撮影にお越しいただいたことに感謝申し上げます。完成した動画は、今後の活動に有効活用させていただきます。

最後に、内閣府の「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」への参画に関連した活動報告です。先日「つながりサポーター」の講師依頼を受け、栃木県および埼玉県寄居町にて講演を行いました。講座は標準化されたシナリオやスライドに基づきつつ、私自身の経験を交えてお話ししました。栃木県ではアーカイブ配信も行われ、次年度からは各市町での展開も予定されているとのこと。また、寄居町では70代前後を中心に、予想を上回る多くの方々にご参加いただきました。受講者の皆様が抱く「孤独の先にある危機感」に触れ、身近な人への声かけを促す啓発の場として、この養成講座は非常に有益であるとアンケート結果からも再確認いたしました。

< 中島会長 >

埼玉の実践がいろいろと広がりを持っていて、養成講座の講師もさせていただいてありがとうございます。本当に、各地域によって、高齢者の方が孤独・孤立の意識が高かったり、あるいは若い人たちの意識が高かったりもあると思います。

動画も本当にいいですね。動画で取り上げられた埼玉りそな銀行の鈴木さん、いかがでしょうか。ご感想でも一言いただきたいと思います。

< 鈴木会員 >

弊社の施設に来て取材をしていただいて、とてもいい動画を撮っていただきましてありがとうございました。この動画もそうなんですけども、こども家庭庁の方で、こどもの支援をしている周辺の大人たちが集まるサミットみたいなものが2月6日にありました。埼玉県からは埼玉りそな銀行と、去年一緒につながる SAITAMA 大賞優秀賞を受賞させていただいた埼玉フードパントリーネットワークの草場さんと参加してきて、全国北は北海道から南は沖縄まで、5団体でいろいろと課題を話し合う、共有し合うみたいなことをしてきました。そこで感じたのは、埼玉県を取組に我々は乗らせていただいて、いろいろとやらせていただいているんですけど、この埼玉県を取組が本当に全国でもものすごく進んでいるんだなと、全国の方とお話をして感じました。なので、私の会社がというよりは、埼玉県全体のモデルみたいなものを全国に広げていけたらいいよね、というような結論になって帰ってきたので、この取組はすごいなと改めて感じたところです。今後ともぜひよろしくお願いします。

< 中島会長 >

こども家庭庁でもつながっていただいてありがとうございます。本当に埼玉県の実践っていいですね。以前、埼玉県にご了解いただいて、公衆衛生という雑誌に埼玉県の実践を書かせていただいたんですけど、そうするとまた、こういうところで話してほしいと話があるんですね。埼玉県の実践は素晴らしいなと思っております。皆さんからはいかがでしょうか。では、済生会の小池さんお願いします。

< 小池会員 >

今年度も本当に多様な取組を事務局の方、また委員の皆様が工夫されて実践されていることが素晴らしいと思います。そして、やっぱり動画の力はすごいんだなと思いました。今、見せていただいた新座子育てネットワークさん、埼玉りそな銀行さん、ムーミンの会さんの動画を見て、今までもそれぞれの活動を素晴らしいと思って知っていたつもりだったんですけども、具体的にこういうふうに行っているんだと分かって、改めて良い取組だと感じました。他にも良い取組がたくさんあって、委員の皆さんの中にも、うちのあの活動も、こういうふう動画で撮ってほしいなと思われたところも多いんじゃないかと思います。

来年度以降も、予算の範囲内だと思うんですけども、少しずつやっていただけたというような話がありました。良い事業をこういう風にわかりやすく動画にさせていただくことで、それぞれの団体もうまく活用できると思いますし、広めていただけたらと思いました。

それからもう一つ。少しずつ会員が増えているということだったんですけども、市町村会員がなぜ全市町村に広がらないのかがすごく不思議で。ここまで増えたら、大抵残りの市町村は入ってきそうな気がするんです。会費がかかるわけでもないですし。躊躇されている市町村さんは理由があるのかなと、素朴な疑問を持ちましたので、もし何か妨げているようなものがあったら教えてください。

< 中島会長 >

そうですね。動画は私も学生に見せようかなと思っています。今のご質問について、事務局からいかがでしょうか。何か自治体の方で躊躇している理由があったりするのでしょうか。

< 事務局 >

ご質問ありがとうございます。理由として、一つは私どもが令和7年度は勧誘と言いますか、未入会の市町村にお声がけを積極的にしていなかったというところがあるかと思っています。声がかからないと入るきっかけがないということもあります。今年度できなかったのも、来年度はしっかり市町村にお声がけしていきたいと思っています。もう一つは、市町村の中で孤独・孤立対策を行う部署を決めかねているところがございます。やはり福祉部局がやるものだという意識がある一方で、保健、地域づくり、総合政策部門だとか、そういったところで担当部局が取りまもらない状況もあるようです。入会するのであれば、そういうところをしっかりと決めた上でないと入りにくいというところがあるかと認識しております。

< 中島会長 >

ありがとうございました。確かに福祉以外の活動にも広げていくというのは、埼玉県としても大事にしているところですので、慎重になっているところがあるかもしれないですね。

< 小池会員 >

ありがとうございました。寄居町さんが今年度に入って、先ほど坂本さんを講師に迎えた活動をされているというようなものもありますので、ご理解いただいて広がっていくといいなと思います。

< 中島会長 >

小池さん、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

私が参加できなかったので教えていただきたいのですが、メタバース空間での活動にご参加いただいた団体はございますか。では、坂本さんから、どんな感じだったかということも含めて、少し教えていただいてもいいですか。

<坂本会員>

今回は少人数での開催となり、昨年同様、落ち着いた雰囲気の中でディスカッションを行う形式となりました。当団体としては2回目の参加であり、操作習熟度は向上してきましたが、依然として参加の呼びかけには難しさを感じています。

特に、当団体の分野においてバーチャル空間に親しんでいる方は少なく、20代の若手スタッフを除けば、支援現場の方々にはまだ媒体としての馴染みが薄いのが現状です。どのように周知を広げていくべきか、引き続き模索が必要であると感じました。

一方で、バーチャルならではの利点も再確認できました。アバターを使用することで互いの顔が見えず、キャラクターを介して音声のみでやり取りをするため、過度な緊張感が生じません。結果として、非常にフラットかつ円滑な意見交換ができる点は、大変印象的でした。

<中島会長>

ありがとうございました。東京豊島区で、全課長向けに孤独・孤立の研修をしたら関心が高く、やっぱり行政から発信していく、あるいはこういう場をつくっていくのは素晴らしいという反応がありました。

他にいかがでしょうか。自治体の方からどうでしょう。東松山市の福島さん、いかがでしょう。自治体の立場から今年度の活動を見ておられていかがですか。

<福島会員>

ご説明ありがとうございました。私の方で気になった箇所なんですけれども、資料の一枚目のところ、埼玉県孤独・孤立対策官民連携プラットフォームの中で、業界団体と民間企業等が会員になっているという部分ですが、この中で、事業を通じて就労への協力等を行うと記載がございまして、私は福祉の部門で、生活困窮者の支援で就労支援も行っておりまして、この部分でどういった取組をされているのか、差し支えなければ詳しく教えていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

<中島会長>

事務局からご説明をお願いします。

<事務局>

ご質問ありがとうございます。就労の協力等を行うという部分は、正直申し上げまして、具体的にこういうことをしていますというのが難しいところでございます。先ほど紹介した動画の中で、ムーミンの会さんが若者の働きかけとして、活動の場というものをやっていたらいいけれども、そういったところから、本来はプラットフォームを通じて、民間企業への就労につながりが出てくるといいと思っています。実際には、企業の方から、もしくはこちらから、こういう協力していきましょうとか、マッチングしていきましょうというようなものは、今はまだ生まれていないところがございます。プラットフォーム立ち上げの時に、こういうことを目標にやっていたものではございますが、この部分には手が入られてない、生まれていないというのが現実でございます。

< 中島会長 >

ありがとうございました。多分、中間的就労とか、そういった部分を大事に考えていこうというところじゃないかと思えます。多様な働き方という意味ですね。福島さん、よろしいでしょうか。

< 福島会員 >

はい。ありがとうございました。

< 中島会長 >

このあたりは、いろいろな団体の方が関わりを持っていただいていると思うんですけども、確かに課題ではありますよね。具体的にどう展開していくか。さいたまユースサポートネットの青砥さん、いかがでしょう。学習支援を中心にいろいろ関わっておられると思います。

< 青砥会員 >

ありがとうございます。先ほどの就労支援のところでは言いますと、私たちも生きにくさを抱えてなかなか社会につながらない若者たちをなんとか地域の企業さんに受け止めていただくというような取組をしております。ただ、いきなり、こういう働き方を希望している子がいますと言っても、企業側の受け入れも難しいかと思えます。彼らにどういった特性があって、どんな困難があるのかというのをしっかりお伝えして、少しずつ段階的な手段でステップアップしていくことを御相談します。例えば、やりやすい仕事から切り出していただく、週に1日、数時間が、週に2日になって、3日になって少しずつ働ける時間を増やしていく。そんな柔軟な受け入れ方を企業の方とじっくりと話し合いをし、関係性を築いて、お願いができるということになっていくのだと思います。そのところをいきなり、就労を受け入れてくださいというのは難しいような気がしています。

ただ、企業さんとしても、人材不足の問題があるというお話も伺います。その中で、困難を抱えた若者たちが取り組みやすい軽微なお仕事を切り出していただくなど、こういったマッチングができるのか、受け入れをご検討いただけそうな地元の企業さんと我々のような支援団体が一堂に会して膝を突き合わせて、お互いにどういうニーズがあるのかを話し合えるような場があると、これが実現していくんじゃないかというふうに皆様のお話を聞いていて感じたところ です。

< 中島会長 >

ありがとうございました。一度、意見交換会の中で、そういった多様な働き方の部分での会があってもいいかもしれないですね。

< 青砥会員 >

そういう機会があると私たちとしては非常にありがたいです。

< 中島会長 >

他にいかがでしょうか。秩父市の上田さん、お願いします。

< 上田会員 >

今、青砥さんからお話のあった就労の関係では、秩父市も居場所づくりサポートセンターを委託してやっているんですけども、そろそろ仕事をしたいという話の利用者さんから出てきても、いきなり週5のフルタイムというのは難しい。そういった場合に、やはり週1日でも行ける時に行けばいいとか、かなり柔軟な雇用を認めてくれる会社でないとなかなか厳しいというところがあります。ただ、そういったところをどのように探していくかが非常に難しいというのが現実的な問題として出てきております。その辺り、青砥さんからお話があったような形で就労をさせてくれる企業を見つけるためには、県が業界団体に声をかけていただくなどしないとなかなか進みません。一自治体で地元しか見ない中では、結構シビアなのかなと思います。支援がある程度進んでいって、就労意欲のある人が出てくると、そこが今後はネックになってくると感じております。何か良い政策があれば、皆さんで協力できるといいと思っております。

< 中島会長 >

はい。青砥さん、お願いします。

< 青砥会員 >

ありがとうございます。私自身が中小企業家同友会の会員で、同友会の中でも障害者雇用推進委員会や共同求人委員会などの委員会があり、人材採用のことについて一生懸命勉強していらっしゃる企業さんが多くいらっしゃいます。私も同友会に参加する中で、なかなか就労に結びつかない若者たちのことについて非常に興味を持ってくださっている地元の企業さんが意外にたくさんいるなということに最近気づき始めております。例えば、埼玉県と中小企業家同友会さんとでマッチングのイベントができるようなら、同友会さんの方はすぐ興味を持ってくださるんじゃないかなと思ったところです。

< 中島会長 >

ありがとうございます。コンパスナビの高橋さん、お願いします。

< 高橋会員 >

私どもの方は、埼玉県から児童養護施設対象者のアフターケアをやっています。ちょっと想像していただきたいのですが、埼玉県の中には児童養護施設が22施設あるんですね。ところが、そのうちの14施設が県北にあるんです。そうすると、児童養護施設を出た時に就職したところが埼玉県の都心部の方にあたりすると、出身施設の人たちは気にはなるけれど手を入れられないんですね。そして、結構重篤な状態になって辞めてしまった時に、本当は辞めないで済むように、もうちょっと手を入れてあげられたらよかったという声が、14施設の施設長さんたちから私たちのところに寄せられます。出身施設から1時間程度で行くことができるようなところに、就職をたくさんさせてほしいんですよ。そのためには、それぞれの地域の、同友会さんだったり、青年会議所だったり、商工会議所だったり、そういうところの人たちが持っている情報や、この事業所さんは心があるよみたいな情報が集まると、出身施設からそう遠くないところに子どもたちを就職させて、安心して職場への定着を見守っていけるんじゃないかと。そして、危なくなってきた時に相談に行きやすいんじゃないか、そういう視点に立っていただけると嬉しいなと思っています。私たちは児童養護施設出身者の就職先を自力で75社、80社、開拓してまいりました。

< 中島会長 >

ありがとうございました。今、多様な働き方が進んでいる一方で、人手不足だったり、雇用が大変なところもあると思うんですけど、武蔵野銀行の谷口さん、いろいろな企業さんの声も聞いておられるんじゃないかと思いますが、いかがでしょうか。

< 谷口会員 >

ありがとうございます。私も全く同じことを考えていて、一方では中小企業の今一番の課題は人手不足であり、業種によって深刻な業種もあるわけです。私も以前、中小企業家同友会の例会に参加したことがあります、青砥さんの話をお伺いして、やはり地元の中小企業の中には、受け入れる環境を整備している会社というのも結構あると思うんですね。あるいは、いろいろな作業工程とかも、フルタイムで難しいのであれば、先ほど出ました多様な働き方とか柔軟な働き方というところで、一部のところを担っていただくですとか。中小企業側の作業工程と就労を求めている方とのマッチングというのは、工夫すればできる環境だと思います。あるいは、ちょっと観点は違うのかもしれませんが、今、埼玉県も AI たまキャリアなどの AI も使って、マッチングの機能でつないでいると思います。部署は違うかもしれませんが、AI 的な視点も入れて、就労を求めている方と企業側を多様な働き方という視点からでもマッチングできるのかなと感じています。

< 中島会長 >

埼玉りそな銀行の鈴木さん、今のお話聞いていていかがでしょう。企業さんとの関係とか、多様な働き方という意味で。

< 鈴木会員 >

武蔵野銀行さんがおっしゃったとおり、企業の、特に中小企業の課題が人手不足にあるので、上手くマッチングすれば成果につながるのかなという一方で、いろいろな難しいことや壁があるはずなので、そこは注意しながら慎重に進めていかなきゃいけない話なのかなと思います。

自分も昨年ですかね、こども支援の団体さんから一人、高校二年生で、学校を辞めちゃうから近くに就職先がないかという相談を受けました。越谷市のお子さんだったんですけど、県内であればどこでもという話もあって、ちょうど飯能市の建設会社さんが、中退した子でも全然ウェルカムだから紹介してほしいと話があったのでおつなぎしようと思ったんですけど、先ほどコンパスナビさんがおっしゃったとおり、知っている地域や、馴染みがある地域じゃないとちょっと怖いということで、越谷から飯能の距離でもマッチングにはつながらなかったことがありました。各地域で開催するのか、埼玉県内全体で開催するのかわからないんですけども、人手不足で悩んでいる企業はたくさんいるはずなので、埼玉県が市町村さんの間をとっていただいでですね、マッチング会みたいなのも始めたら成果につながるんじゃないかなと、お話を聞いて思っていました。

< 中島会長 >

ありがとうございました。さいたま市の金澤さん、今みたいな話というのは、孤独・孤立の関係で行政でも出てくるものですか。

< 金澤会員 >

さいたま市では、今年度から孤独・孤立対策検討部会という庁内 60 課を委員とした部会を立ち上げまして、ちょうど先週 3 月 17 日に部会を行ったところです。孤独・孤立の問題というと、福祉ですとか、相談部門によりがちであるというところはどうしてもあります。相談部門が中心ではあるんですけども、孤独・孤立は社会全体の問題であるということも踏まえまして、経済部局や、住宅政策部門、水道局、教育委員会など、幅広い部署を集めて検討を行い始めたということになります。

そこで、まずはみんなでできる・できないかではなくて、こういう取組があつたらいいのではないかということをもまず話してもらいましょうということで意見交換を行いまして、その時はやはり居場所づくりですとか、相談体制をという話がかなり多く出てきました。就労というところには、その時点では意見は出ていなかったんですけども、就労というのも居場所の一つであると思います。私たち福祉部門だけでできる話ではなくて、やっぱり行政が縦割りであるということが大きな課題だなと今聞いていて感じたところです。話題にはなっていないんですけども、私たちは再犯防止も所管している部署ですので、そういう視点も含めると、そういう取組は大事だなと感じたところです。

< 中島会長 >

ありがとうございます。再犯防止の話も出てきましたけど、多様な機会、多様なつながり、そういうものをつくっていくことは大事ですもんね。

県社協の熊井さん、福祉人材センターも持っていますし、生活困窮の窓口もやっておられると思います。今の議論は関係が深い部分もあると思うんですけど、いかがでしょうか。

< 熊井会員 >

孤独・孤立対策というと、何かすごく難しいことをやらなきゃいけないような印象もあるんですけど、皆さんの話を聞いて、多様な関係者がつながることや、先ほどの動画のような啓発のためのいろいろな取組などによって、身近に感じてもらうきっかけを作っていくことが大事なのだと思います。

先ほど話題にでた就労支援で言うと、いきなり普通に就職することが難しい方は、孤独な状況にもあるのではないかと考えています。県社協では、県内の社会福祉法人施設や市町村社協に協力をいただいて、地域における公益的な取組を推進し、生活困窮者の就労支援をやっています。それは例えば、県内の社会福祉施設でまずはできることをやる、又は行ける日に行くといった、ある意味は就労前の訓練みたいな形でやっている支援です。県社協の役割としては、一般就労する手前で中間支援をしたり、支援に取り組むための仕掛けやつながりをつくることか思います。特に、生活困窮ということでは、コロナ禍を機にいろいろと生きづらさを抱えている人たちが顕在化したという実感があります。こうした人たちの支援について、今日のメンバーの皆さんもそうですが、それぞれが持っている強みをつなぎ合わせると何か支援ができる、そのきっかけとして啓発によって幅広く知っていただくことや理解いただくことが必要だと思います。

< 中島会長 >

社会福祉法人の取組を教えていただいて、ありがとうございました。様々な実践をやっていただけてますね。

また、さいたま市の実践もすごいですね。60 課まで広がって、本当に幅広い視点で議論を始めていただいているので、非常に今後の動きが楽しみだなという話を聞かせていただきました。

実は昨日、東京の練馬区で就職氷河期世代の問題をどうするかという議論をして、前の日は豊島区でひき

こもりの議論をしたんですけれども、東先生、いかがでしょうか。多様な働き方って意味での部分も議論があったんですけども、何かご感想をいただいてもよろしいでしょうか。

< 東会員 >

とても大切だと思いますね。出口のところというか、社会に参加していくつながりの部分で。それは、この会議でも何度も出てきています。だから、参加団体の中にサポステが入っていないような気がしたんですけども、サポステはその部分で苦労されているんじゃないかと思います。好事例やどんな苦労があるのか、また違った目で見られるのかなと思いました。

ただ、私は教育とか子どもの方が専門なので、この1、2年の動きでいきますと、出口のところも重要なんですけど、やっぱり不登校とかひきこもりでどこにもつながらない子どもたちが増えてきている傾向で、少なくとも減っていないんですね。いろんなことをやってるのですが。しかも、それに合わせるかのように自殺者数が増えていて、2年前は小中高だけで500人を超えていて、先進国の中ではちょっと稀な状況になっているんです。そのところをどうしたらいいのかというのが、今、特に青少年行政の方ではすごく重要なポイントなんじゃないかなと思います。

メタバース空間をつくるというのは、埼玉県はトップランナーで始めたと思うのですが、今はいろいろな自治体で始めています。去年あたりは子ども家庭庁だと思うのですが、AIを使った相談の仕組みづくりの研究を始めていて、確か兵庫県の三田市とか柏市がAIを使った相談を試験的にやってみたら、対人関係に一步踏み出すのが難しい子たちが、相手がAIだったらいいだろうと、結構相談に入ってくるみたいなんです。もちろん、去年11月にチャットGPT使って相談していたアメリカの子どもが自殺してしまったというような事件があったりして、使い方とか仕組みは考えなければいけないのですが、いわゆるインターネット上に居場所を考えている子が多いという調査も多くあって、メタバースはずいぶん充実してきたので、もう一步そこから踏み出して、AIとかネット空間上の居場所というのをどうつくっていくのかといったところを試行的にできるものがあれば、考えていけるといいと思います。

やはり子どもの自殺がこんなに増えて、全然減らないというのはゆゆしき問題だなと思っています。

< 中島会長 >

ありがとうございました。今、東先生がおっしゃっていたのは、この後の議題2で議論したいと思っているのですが、私も実は厚労省でSNSの相談ガイドラインの見直しをちょうど終えたところで、AIをどうするかということも含め、議論をしました。自殺幫助とかにつながってしまうような犯罪もあったので、このガイドラインを厚労省でつくっています。なかなか難しい議論なので、生成AIを直接、人の相談に使うところまでは、実は議論しないことにしました。ただ、いろんな集計をしたり、そのものを活用していくのは有効だろうという形で整理しました。もう間もなく出ますので、ご指摘をいただけたらと思います。

一方で、私も少し関わっていますが、子どもの自殺は過去最多と発表になったと思います。全体としては2万人を切って、全体の数は初めて減っていますが、小中高生は東先生のご指摘のとおり過去最多でございますので、ここは他の先進国にはないことで、もっと真剣に、今まで以上に議論が必要なんだろうと思います。ありがとうございます。

このテーマは前回は皆さんにご指摘いただいていますので、ぜひこのプラットフォームでもしっかり取り上げていきたいと思っています。ありがとうございました。

また、就労の部分の話がありました。ここでの議論というのは次の意見交換のテーマを生み出していく重要な話し合いでして、前回の議論も来年度のテーマ案につながっていますので、今回もご議論いただいた中間的就労と

か多様な働き方が次の意見交換の重要なテーマになってくるかなと思います。ありがとうございました。

金澤さんから手が挙がっていますね。お願いします。

<金澤会員>

AI 相談の話が出ましたので、少しご紹介させてもらえればと思います。さいたま市の方では、先日、3月5日から孤独・孤立対策の一環としまして、傾聴 AI のチャット相談窓口というものの実証実験を始めたところがございます。

今、東先生の方からお話がありましたとおり、若い方というのは直接相談をする、電話をするということに抵抗感があるだろうということもございます。こどもに特化しているというものではなくて、孤独・孤立対策ということで、広く誰でもご利用くださいとご案内しているところではあるんですけども、主なターゲットとしては、電話に苦手意識がある方ですとか、行政の相談窓口は平日の昼間が多いですし、民間の電話相談も夜間になるとつながりづらいということもありますので、そういう方たちの相談を AI に代わってもらおうという発想ではなくて、人につながる前に背中を押してもらおうというか、AI に話を聞いてもらって、自分の考えを言語化して、少し整理することで人に相談してもいいかなというふうにつながればいいなと考えております。6月4日までということを開始したところあります。また結果を見ながら、実装していくのかどうかを検討するという段階にあります。

<中島会長>

ありがとうございました。本当に今、若い人たちにとって電話は敷居が高くなっていて、もう使わないという方が多くなったので、チャットボットとか1回試しにやってみて、どんな答えが返ってくるか試してみたら相談するとか、知らない人の方が相談しやすいとか、そういう感じですね。皆さん、専門の方々ばかりだと思いますけども、本当に新しい相談の時代が来たかなと思っていたところなんです。またぜひ色々教えていただけたらと思います。

それでは、続いて議題2「埼玉県孤独・孤立対策官民連携プラットフォームの令和8年度の活動予定について」ということで、事務局からご説明いただきます。今、お話があったこどもの分野も出てきますので、そこでまたご意見いただけたらと思います。では、事務局からご説明をお願いします。

<事務局>

議題2について資料説明

<中島会長>

ありがとうございました。ご説明いただいた資料の3枚目にテーマ別意見交換会の開催案なども出ておりますので、そのことも含めてご意見いただけたらと思います。

自殺対策については、元々は NPO やボランティアに支えられてきた領域で、命の電話やチャイルドラインをはじめ、今はライフリンクさんとか、あなたの居場所さんとか、オーバーさんとか、ボンドプロジェクトなど、いろんな NPO が全国的にも活躍をしているかなと思います。そういった中高生向けの SNS を中心とした相談を少し学びながら、一方でどんなことができるのかという知恵をみんなで出し合えたらと思います。

ぜひ、皆さんからいろいろご提案をいただけたらと思います。全体を通していかがでしょうか。さいたま NPO センター村田さん、お願いします。

< 村田会員 >

若年者の自殺対策のところ、小中高生となっているんですけども、大学生も入れていいのではと思っています。私どもは現場を持ってないのですが、ケアラー支援というところで少し現場的に関わっていて、県内の大学で若者ケアラーの調査を地域包括ケア課と教育局が実施したんですね。そうしたら、ケアラーが結構いたということで、高校生におけるヤングケアラーの占める割合とそんなに変わらない値が出ていました。今年度初めて大学の教職員、カウンセリングルームの先生たちを対象とした、若者ケアラーの現状を知ってもらうための講座が実施され、東京の NPO が受託したので、ネットワークのある私どもも手伝いました。

県立大学と坂戸にある栄養大学、それから浦和大学に訪問させていただきました。私たちの時代は大学生はエリートで、そんなに困っていないと思っていたんですけど、今は困っている大学生が多いんですね。

大学の先生に聞いてみると心当たりがありますと、兄弟の面倒を見ている子とか、父親、母親が精神を病んでいて、その面倒を見ている子や、祖父、祖母の面倒を見ている大学生が、結構いますというお話でした。それが学業や進路がどうなっているか、そこまでのデータはまだありません。実際、白梅学園大学という東京の大学ではケアラズカフェを毎月 1 回やっているんです。そこに即席の食料品とか、そういうのをフードバンク経由で置いとくとなくなる。それを目当てに来て、おしゃべりして帰っていくということがあるそうなんです。やっぱり若者は言い出せない。自分たちは健康で強い人たちと思われているので言い出せない。でも、ケアラズカフェがあるとボソボソと話をしていく。奈良女子大学の先生もそのようなことをおっしゃっていました。私たちは結構気づいてないのですが、21、22 歳ぐらいの自殺者が多かったのではないのでしょうか。そうするとやっぱり大学生というのも、支援の対象だと、最近思っているので、枠を広げていただけないかなと思います。以上です。

< 中島会長 >

ありがとうございました。かつて日本の自殺は、中高年の男性が非常に多かったのですが、ご指摘ありましたように、今、女性も増えてきているんですね。20 代、30 代くらいですね。そういったところも対象にしてはどうか、大学生を対象にしてはどうかというご指摘でした。ケアラー支援は本当に埼玉県も頑張ってきたところだと思います。ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

大事なお指摘、いろいろいただきたいと思います。坂本さん、お願いします。

< 坂本会員 >

実態調査が再度実施されるとのことですが、前回の調査では16歳以上の個人を対象に無作為抽出で行われました。これに加え、今回は県内に整備されている「こどもの居場所」等を利用している方々を対象としたカテゴリを新たに設けてはいかがでしょうか。居場所の利用によって孤独感・孤立感がどのように変化するかを比較・分析できれば、本県の施策を反映した独自の調査結果が得られるのではないかと考えます。

前回は 16 歳以上の 1,500 名に対して調査票を送付し、その回答を分析されました。無作為抽出によって県民全体の傾向を把握できる一方で、例えば県内に約 800 か所ある「こどもの居場所」の利用者に対しても同様の調査を実施すれば、居場所へアクセスしている層とそうでない層との比較が可能になります。これにより、居場所が持つ効果や有効性を客観的に測定できると考えますが、いかがでしょうか。

< 中島会長 >

はい、ありがとうございました。事務局、いかがでしょうか。

<事務局>

ご質問、ご提言ありがとうございます。現時点では前回調査をある程度引き継いだ項目でと考えておりますが、会員の皆様からのご意見もいただきながらと思っておりました。その中で今いただいたご視点、非常に重要だと思っておりますし、来年度の意見交換のテーマにこどもを置くのであれば、調査対象をこどもにも広げていくことは十分に考えたいと思っております。また、こどもの居場所を利用している方との比較については、やり方としては大きく二つあるかと思っております。無作為抽出をした方への調査項目にこどもの居場所を利用したことがあるという項目をつけて、利用した人と利用していない人の差を取るというのが一つ。もう一つは、この無作為抽出の調査とは別に、こどもの居場所のネットワークさんとかにご協力をいただいて、同じ項目の調査をかけて比較するという方法があるかと思えます。どのような方法が効率的、効果的かを考えながら、どの程度対応できるか検討させていただきたいと思えます。

<坂本会員>

ありがとうございます。お話を伺って、やはり後者の案がいいなと思えました。前者の案も、項目を一つ増やすだけですので、ぜひあわせて検討いただけると嬉しいです。

ただ、対象が16歳以上となると、小学生が調査から漏れてしまう点は少し気になっています。また、利用している子たちだけでなく、そこを運営している「主催者側」の方々についても、ぜひ目を向けていただきたいです。こども食堂が始まった頃は、ご年配の方が「自分自身もつながりが欲しい」という思いで始められたケースも多かったんですね。主催者側の孤独・孤立対策という視点からも、何か新しい発見があるのではないかと期待しています。ぜひ、何らかの形で調査に反映していただければと思います。

<中島会長>

ありがとうございました。場合によっては量的な調査ではなくて、いくつかの団体に対するヒアリングを丁寧にやっていく方法もあるかもしれないですね。ありがとうございました。

土屋さん、お願いします。

<土屋会員>

私たちピッコラーレという団体で、埼玉県ではにんしん SOS 埼玉を受託させていただいています。先ほど大学生の孤立ということが挙がっていたかと思えます。実際に大学生で学校に行くのに、親との関係性がうまくいっていない。だけど、社会に出ていくために、学費から生活費まですべて自分で捻出されて、大学に通われている方たちがいらっしゃいます。そういった中で、消費者金融にお金を借りていたりとか、効率的に短時間で働かなくてはいけないということで、夜の仕事を受けていたりという中で妊娠ということが起きてきます。すると、親にも頼れないですし、学校の友達にも相談ができないということで、もう本当に死ぬしかないのかなというような形で相談にたどり着かれる方たちがいらっしゃいます。まだ妊娠中期ぐらいであればいいのですが、お会いした時には 30 週から 36 週という本当に出産に近い時期になっていて、学校に行くのにも人目を気にするような状況の方もいらっしゃいます。そういう状況で、やっと相談窓口にとり着いても、出産することが親にバレて、これ以上関係性が悪くなると困るので、どうにか親にバレないように出産ができないか、そしてこどもを特別養子縁組に預けたいというようなご相談などがあります。

SOSに相談を寄せられる方は、基本的にすべての方たちが妊娠したことによって孤立している方たちではないかなと考えています。友達にも学校の先生にも親にも誰にも言えない。だけど、この妊娠をなんとか終わらせたいという願いをもっています。ただ、現実的にそれが難しい状況で病院に行こうと言っても、身バレすることを恐れて病院に一緒に行くこともできず、日にちだけが過ぎてしまったりして。そういった中で、直接お会いさせていただいてお話す中で、なんとか病院の受診につなげたり、保健センターや生活保護の窓口にもつなげさせていただいています。

先日10日ほど前に、埼玉県でも15歳の子が乳児遺棄をしてしまうという事件がありました。あの子も普通に埼玉県で生活をしていることでも、おそらくそんな特別な子ではなかったのかもしれないのですが、本人にとって希望してない妊娠が、突然困りごとと孤立に発展してしまって、自分が死ぬか赤ちゃんを殺してしまうかという、本当にギリギリのところでなんとか生きている子たちなのかなと思っています。

埼玉県の方では、来年度にもんしんSOS埼玉を受託させていただくことになり、来年度からはチャット相談も始まる予定です。AI相談で相談窓口を教えられて、なんとか相談につながっている方もいらっしゃるのですが、AIの活用ですとか、チャットはどこまでこの子たちを守れるかというところで、今後も活動していきたいと考えています。若年の方だけではなく高齢の方でも、妊娠が困りごとになっている方はおり、もっといろいろな背景を抱えて複雑になっています。どの年齢層でも、もんしんSOS埼玉の方におつなぎいただければ、対応させていただきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

< 中島会長 >

大事なご指摘、ありがとうございました。

谷口さん、お願いします。

< 谷口会員 >

今朝の朝日新聞の一面と二面で、こどもの自殺で見えぬ要因というのを読みました。若年層の自殺対策ということで、小中高で自殺が増えている中で状況不明が56%と、理由がわからないということが一番問題なのかなと感じました。ケアラー、望まぬ妊娠、貧困など、色々理由はあるのかもしれませんが、結局亡くなっても、なお、その気持ちを理解されない子どもが多い。さらに、女子中高生が増えている。原因がまだ社会ではつかみきれていないということは、自殺防止を考える上では重要かなと思いました。調査の際には、例えば自殺未遂で搬送されている子に向き合う門番ということで、埼玉医科大学病院の先生などの取組なども新聞で紹介されていたので、幅広く病院関係ですとか、教育関係にもヒアリングした上でこのネットワークで対策を考えられるのもよろしいのかなと思いました。

< 中島会長 >

ありがとうございました。こども家庭庁が研究事業で要因分析をしているんですけど、原因がわからないんですよね。しっかり分析できていないので、それをやりましょうということでやっています。今、いろいろな知見が求められていることだと思います。埼玉でも何かできると思いますよ。本当にありがとうございました。

宮代町の小林さん、いかがでしょうか。

< 小林会員 >

宮代町の小林です。宮代町の方では積極的に何か取り組んでいるわけではないのですが、昨年度参加した

意見交換会で皆さんの取組を見て、こういう取組の方法があるのかという気づきがありましたので、是非ともまた意見交換会で様々な事例を紹介していただければと思います。

< 中島会長 >

ありがとうございます。唐澤さん、いかがでしょうか。

< 唐澤会員 >

私たちは本当に小さな団体で取り組んでいるんですけども、就労支援のお話は、とても興味深く聞かせていただきました。本当にいろいろな部署の方の参加の中で、就労と困っている若者のマッチングができるような場になったら素晴らしいなと思いつつながら、聞かせていただきました。私たちも就労の時に、その状況を理解して受け入れていただける企業や、働く場所を見つけるのがとても大変なので、ぜひそういうところでお話が進んだら嬉しいと思いました。いろいろ学ばせていただきまして、ありがとうございます。

< 中島会長 >

ありがとうございました。春野さん、いかがでしょうか。

< 春野会員 >

私たちの団体は非行の問題で悩んでいる親の支援、相談窓口ということで委託を受けています。目の前の親やこどものことで頭がいっぱいで、皆さんの話を聞きながらつながりが欲しいなと思いました。先ほどの妊娠の話も、そこにつなげられるといいと思いました。本人がつながってくださらないとダメなんですけれども、つないだらなんとかしてくれるんだと心強く感じました。

再犯防止ということも、先ほど言葉として出ましたが、事件を起こしてしまうようなこどもの背景としては、やはり孤立です。それが最大だと思います。何かあってどこかにつなげていくというのは、事件が起きたり、いろんなことが起きれば、みんなで寄ってたかってやるのですが、結局その前に孤立が起きているわけなんです。それはどこかという、やっぱり学校なんです。学校と言っただけなんです、要するにこども同士のこと。親や家庭の問題とこどもは言いますが、少しでも何かあれば、親はうるさくなりますので、学校に行かなくなったり、乱暴になったり、そういうふうになれば、親子関係は悪くなるんですね。そうするとこどもは家に帰りたくない、親がうるさいということで、親をなんとかすればと思ってしまう場合が多いと思いますが、結局その前に友達が欲しいんですよね。こどもはやっぱり同世代の友達から外れてしまうということが多分一番辛いんじゃないかな、人によりますから、100パーセントではないですが、そう感じています。いろいろなところにつなげようと思っても、やっぱり欲しいのは同世代の友達だととても強く感じます。こどもは同世代の友達ができないということは恥ずかしくて言えない、その方が辛いことなのではと思います。親も必死でなんとか変わろうと、頑張ろうと思っています。お話を聞きながら、学校関係とか、その辺のところ、どんなふうに関わってくださるかと思いました。

それと併せて、就労となると年代が20歳過ぎになります、アルバイトやボランティアとかにつなげられるといいなと思う場面がいくつもありました。ボランティアで受け入れてくれるところが地域のいろいろな場所にあるといいなと思いつつながら、今参加メンバーの一覧などを見ていました。やはり特性があったりとか、友達ができないタイプの子だったりとか、いろんなことを抱えているので、ボランティアにしてもアルバイトにしても、難しいところはあります。なかなか続かないとか、できないとか。そういうことも考えながらお話を聞かせていただきました。いろいろ頭の中をぐるぐる

ると巡っております。ありがとうございます。

< 中島会長 >

ありがとうございました。春野さんの話を聞いていて、コロナ禍にオンラインで一人一人の学生と話をしていた時に、大学の食堂に一人で行けなさいいけないのが不安だと言っていました。友達が誰もいないから、学食で一人で食べられるかなと不安を感じている学生がいました。友達の話も出まして、とてもつながりが大事ですね。ありがとうございました。

秩父市の上田さん、いかがでしょうか。

< 上田会員 >

今、学校の話が出たんですけども、事務局にお伺いしたいのですが、教育部局との連携はどうでしょうか。こちらは教育部門と連携をしたいのですが、非常にハードルが高くて、連携していくのが難しい状況です。孤独・孤立の起きるスタートが不登校からひきこもっていくケースも非常に多いはずなのですが、入り口の部分で教育部門との連携が難しい状況です。県としては、どのようになっているのかをお伺いできればと思います。

< 中島会長 >

事務局からお願いします。

< 事務局 >

ご質問ありがとうございます。教育部門と福祉部門など、色々と福祉以外の他の部局との連携がある中で、おっしゃるとおり教育との連携というのはハードルが高いと言いますか、壁があるというのは常々感じております。ただ一方で、先ほど村田会員からも話があったように、ケアラー支援などでは連携ができているようなところもございますし、私も以前発達障害の支援などでは教育局と一緒に研修を実施するなど、部分部分では教育局とタッグを組んでいる取組もございます。孤独・孤立というところになりますと、やはり教育としては個人情報ですとか、なかなか難しい壁がケアラー以上にあるのかもしれませんが、こういった形で教育部門と協力できるかというのは、来年度、小中高生、また大学生も入ってくるかもしれませんが、自殺対策というところをテーマに掲げるのであれば、必ず教育局と何かしらの連携をしなければとは思っています。県としても秩父市さん同様にハードルが少し高いとは常々感じております。

< 上田会員 >

ありがとうございました。できれば県の方からそういう連携ができていくようになると、多分市町村レベルでもやりやすいのかなと思うので、ぜひよろしく願いいたします。

< 中島会長 >

学校内にカフェを作っているような高校もありますし、先ほど東先生が言っていたサポステとの連携事例も教育の分野だったりするのですが、いろいろ考えていけたらと思います。

埼玉りそなの鈴木さん、いかがでしょうか。

< 鈴木会員 >

今教育局さんとお話が出たので、今年度やらせてもらった経験の中で、感じたことをお伝えします。今年度、昨年の11月と1月の2回にわたって、メタバース空間での金融教育をやらせていただきました。実際には深谷のフリースクールさんとチャットでつながって、我々が普段学校で出前授業をしているような内容だったり、もう少し優しめの内容であったり、お金の仕組みだったり、銀行の中の職場体験みたいなのを動画で流したりとかですね。そのようなコンテンツでやらせていただいたのですが、率直な意見としては、メタバースなので意見とか質問とか反応がすごくいいんですね。実際に出前授業でやるよりも、チャットで質問をしてくれたり、チャットでちょっとふざけてみたりとかですね。普段対人的になかなかアクションが取りづらい子たち、学校行けてない子たちも、チャット上だったら素直になれるような感触がありました。教育局さんも感じていらっしゃると思っていて、これは継続していくべきだよねというところで終わっているはず。先ほどのメタバースのこともありますが、同じ方向を向いているはずなので、相乗効果みたいのがあるかなとは思いますが、ぜひ参考にいただければと思います。

< 中島会長 >

ありがとうございました。とてもいい取組ですね。秩父市の上田さん、お願いします。

< 上田会員 >

今、メタバースの話が出たので、県の教育局でメタバースを始めているんですけど、それも子どもが参加する場合に学校にお願いしてIDをもらわないとメタバースに入れないというハードルの高い状態です。メタバースを広めていくのであれば、もっと自由に入れるようにできるとよいのではないのでしょうか。多分不登校のお子さんが、そこで学校と折衝してIDを取るという作業は非常に大変なのではと思います。せっかくいいものを作っているのもっとハードルを下げてもらって、誰でもアクセスできるようにしてもらいたいかなと思います。今鈴木さんからメタバースが非常に有効という話もあったので、もっと使えるようにしてもらいたいと感じましたので、福祉政策課から教育局に言っていただくといいと思いますので、よろしくお願いします。

< 中島会長 >

ありがとうございました。教育の部署の人でも来て話してもらいたいんですね。またみんなで考えていい形の議論ができたらと思います。

コンパスナビの高橋さん、お願いします。

< 高橋会員 >

私たちの団体の中で、自立準備ホームというのも営んでおります。さっきの再犯防止の話なのですが、女子の刑余者で居住先のない人たちを一定期間住まわせています。若年の17歳の女子がいるのですが、非常に重たい言葉を口にしました。虞犯少年でいろんなことやらかしてきたんだけど、15歳の時に母親を癌で亡くし、13歳の時に父親が出て行った。暴れるすごく難しい兄がいる。そんなの近所の人にはみんな知っていた。だけど誰一人我が家に声をかけてくれなかった。

ここなんですよね、孤独・孤立の根っこって。あの家はやばい家だと、ちゃんと近所の人には分かっていたはずだということを、その女の子が言っていた。その子は2月1日から介護職に就いて、1日も休まずに仕事を続けられるようになりました。可塑性の高い、若い虞犯者ですけれども、こんなに変えることができる。早いうちにその家庭で起

きている異変に気がつくような、そういう地域社会になっていくにはどうしたらいいんだろうかということ、大人が一生懸命考えていかなきゃいけないということをお伝えしたかったのが一点。

あともう一つ、コンパスナビの方では、社会的養護関係の相談を受けておりまして、このところ増えているのが教育虐待なんです。親が貧困でとか、虐待やネグレクトしましたというのがこれまで11年間来ていた相談ですが、ここに来て増えているのは、実家は裕福で、親からのもっと勉強なさいという要求に応えられないことで虐待され、行政の力で保護された後の子たちが、高校を中退せざるを得なかったが、なんとか学びを続けたかと言って、コンパスナビに相談に来たのが2件ぐらいあった。教育虐待が出てきているということもお伝えしておきたいなと思いました。

<中島会長>

ありがとうございました。事務局で用意していただいた。視聴傾向の結果、今後の反映や、孤独・孤立の実態調査については、概ねこの方向性でよろしいでしょうか。みなさん頷いていただきましたので、この方向で進めさせていただきたいと思います。

テーマ別意見交換会につきましては、みなさんの関心が高かったのが案1でございますので、案1というところで、事務局と相談しながら進めさせていただけたらと思います。

それでは今日の議論としてはここまでとさせていただきます。事務局にお戻します。